

## F. Scott Fitzgerald におけるアメリカン・ゴシックとロマンスの融合—1930 年代初頭の三短編を通して

千代田 夏夫

### ・はじめに

本稿では F. Scott Fitzgerald の“A Freeze-Out” (1931) “The Rubber Check” (1932) “Crazy Sunday” (1932)(以下其々FO、RC、CS と略す)三作におけるラブ・ロマンスが、1920 年代の経済を反映した金融・証券用語および 1930 年代に興隆した映画業界の設定とアメリカン・ゴシックの独自性が古典的ゴシックに融合した枠をもって語られる様子を検証する<sup>1</sup>。仇なす先祖の罪、不当な相続、幽霊や古い館 (Hogle 2)、肖像画(Botting 122)、狂気(Goddu 5)、僭主(Ellis 194)、死者の回帰 (Savoy 185)、エコー(Sedgwick 9)、過去からの亡霊(Sedgwick 10)、過剰性 (Botting 1, Gamer 28, Hurley 137) 等、多くの英米ゴシック研究が共通要素としてみなすモチーフが三作には充溢する。本稿では上記のモチーフ群に、Goddu が述べるアメリカン・ゴシックの独自性を加えたい。即ち、「種々の形態」をとる「変容性(mutab[ility])」(Goddu 5)「不安定さ」「境界侵犯と種々の形状の剥ぎ合わせ」(Goddu 5)という性質である。これらが形成する不定性が、パフォーマンスを喚起しゴシックを成すのである。

Goddu は、アメリカン・ゴシックがその語りの“incoherence”をもって「アメリカの自己表象の不安定さ」「(理想の影に奴隷制という矛盾を抱えた) アメリカの国家的『新世界の無垢』神話」の欺瞞を暴くと論じる(Goddu 10)。変容性、ゴシック、パフォーマンスは不可分な三要素なのである。加えて Goddu は“abject”の語で「ゴシックが語る、国家のアイデンティティを形成し同時にその維持の為に抑圧される歴史上の恐怖(historical horrors)」を指し示す(Goddu 10)。また 1920 年代はゴシック批評の確立した時期でもあったことに鑑み(Ellis 12)、殆どのゴシック研究が英米ゴシックの開始点とする Horace Walpole の *The Castle of Otranto* (1764, 以下 *Otranto* と略す)を、ゴシックの雛型として適宜参照したい。三作には「強い母」のモチーフも共通する。主人公の結婚を実現させる曾祖母 (FO)、数回の結婚と息子の小切手の不渡りを敢行する主人公の母 (RC)、そしてハリウッドの大立者が“mother complex”を抱く彼の母である (CS)。強い母系は作家自身のジェンダーの揺らぎからも解釈できようが<sup>2</sup>、原点 *Otranto* においては正統たるセオドアは元の城主の娘の孫であり、女系/母系が正統性を保証していることに鑑みれば、ゴシックにおける母系は基本事項と言ってよいだろう。以下、先述のゴシック構造について、主として FO に古典性、RC にパフォーマンス性、CS に両者の融合を見ながら、確認したい。

### 1. “A Freeze-Out” (1931)

FO は舞台となる町を出奔後再び帰還したリッカー家の娘アライダと名家の息子フォレストのラブ・ロマンスであるが、リッカー家の「もぐり仲買(bucket-shop business)」(386,389)の過去が絶えずそのロマンスの成就を脅かす。84 歳の曾祖母とその“remoter descendants”たる両親、フォレスト、妹エレ

ノア (Eleanor) が住む「広いヴェランダのある旧い家」(384)もゴシック風である<sup>3</sup>。「幾ばくかの伝統を有する土地出身」(386)を誇りにする父親、「八十年間町と同一化されてきた一族」の歴史を説く母親(396)らにとってもぐり仲買の過去をもつリッカー家の帰還は許しがたいものであり、ここに金融用語と「過去からの亡霊」という古典ゴシック・モチーフの重なりが確認出来る。そしてこの「もぐり仲買」の「エコー」(389)は地元紙の掲載を通して反復強化される。主体の一貫性を脅かす歴史的恐怖という Goddu の説明に照らせば、リッカー家は“abject”であるといえよう。なおフォレストとアライダの出会いにおいて「放蕩息子」のレコードの有無が尋ねられる件には新約聖書(Luke 15: 11-32)のモチーフが確認される(383)。二節最後でフォレストが外向く“the Rikkers’ gold, ill-gotten, tainted”(392)の象徴であるダンスは、*Otranto* や *The House of the Seven Gables* など古典ゴシックに共通する、不当に篡奪され継承された財産というモチーフと同根である。

リッカー家を表面上受け入れた父の行為を息子は“trade”と呼ぶがそれは禍々しい“traitor”に聞こえる(388)。この話は篡奪者マンフレッドが真の城主を“Traitor!”と呼び(31)また逆に“traitor-prince” (71)と呼ばれる件など、*Otranto* でも重要な位置を占める。自身も「五代にわたる名誉」(387)を誇っているフォレストは「彼女の父親がしたこと」(391)「君のお父さんの問題」(394)に拘る。対して「父の問題」「父の罪」(395)を負うことをアライダは拒む。アライダの父の過去は、ロマンスを凌駕して絶えず回帰するのである。自らの土地と一族への密着をフォレストは両親への“debt”(395)と表現し「親の親が与えてきたもの、親が手渡すに値すると考えているもの」(395)という相続のモチーフが示される。二人の間は「高祖母になりたい」と更なる世代の蓄積を願う曾祖母によって調停を得る(397)。式当日、「亡父の真似」をして室内を歩きまわりながら、「お前はあの女をこの家に入れてはならぬ、お母さんに会わせてならぬ、悪い血は悪い血だ([bad blood is bad blood])」(400)と独語するフォレストの父の姿はゴシック要素を多分にはらむ。血液そのものと同時に血筋を示す「血」もまた、吸血鬼等の境界侵犯的イメージを伴いながらゴシックを形成することにも留意したい (Ellis 191)。

## 2. “The Rubber Check” (1932)

RCは富豪モートメイン家との交友とその最中の母親による“lesson”たる小切手不渡り事件を中心に、主人公ヴァルが「本当の教育の年月」(419)を経て「洗練される」(436)物語であり、基本的には貧しい男と富める女という作家馴染みのロマンスの枠内で進行する<sup>4</sup>。冒頭に描かれる母親の四度目の結婚に際し息子は結婚相手による財産奪取を心配するが、これは継父がしばしば王位や財産の篡奪者となるという古典ゴシックの雛型に呼応している。またヴァルがどの姓を名乗るかという問題は「父の過剰」を示す。*Otranto* で度重なる縁組の試みを中心に、実子と義理の子の区別が曖昧になり「父/母の過剰」の事態が起こる件にも通じよう。ヴァルが入り込むモートメイン別邸は“towers”“wings”“gables”を備えたゴシック風邸宅である(417-8)。「モートメイン (Mortmain)」は仏語で直訳すれば死んだ手、また「死手」(不動産を宗教団体などに寄付するとき、永久に他に譲渡できないようにした譲渡形式)<sup>5</sup>という金融用語でもある点に注目したい。冒頭から、現世に影響を及ぼす死者というゴシックモチーフが人名として現れるのである。

出自を隠してモートメイン夫人に“nobody”として認められた「証券会社」(419)勤めのヴァルは、仕

事そっちのけでニューヨーク社交界に出入りするが、支払い義務のないある席上で（母親の支払い拒否により）不渡り小切手を出したことで、社交界から排斥される。この「小切手事件の古い毒」(428)は、「幽霊」(428)としてくり返し現れて彼の行く手を阻む。その件に説明をつけるタイミングも「総決算のとき」(428)と、金銭のモチーフで描写される。この構図は、FO において帰還したりッカー一家に“bucket-shop business”が付いて回った件とアナロジーを成す。

令嬢エレンをエスコートする際の「彼の役(role)が彼を支配して、突如ニューヨークの Val Schuyler という新しい人格となった」という件<sup>6</sup>(420)、「傲慢な仮装に自己陶醉している」様子(422)、零落してから語られる「我々共通の虚栄の蜜」(427)たる鏡の前での確認作業、「威風と演劇性的感覚」(430)等、ナルシズムと表裏一体をなす彼のパフォーマンス性は友人達を「自分自身の鏡、その前で彼極めつけの見栄を切っけて見せる聴衆」(33)としてしか見ない *This Side of Paradise* の主人公エイモリーの特性に繋がろう。ここにもエイモリー-ギャツビーに連なるパフォーマンス性の系譜が見られる。またモートメイン別邸を見て「ここが自分の居場所」と決めた後実際にそのように取り込まれてゆく様子や、エレンの恋人の「役にとりつかれ」「突如として彼は実際に彼女を好きになった」(420)という記述からは、言語行為論的見地からの言語遂行性も確認できよう。そして何よりも「彼が証券会社で求めた『キャリア』は社交の「幕間劇(interlude)」(419)に過ぎなかったのである。

社交界にあって「実際には自分が何者でもない」(425)事実を忘れがちであった彼は、“calm dowagers”(426)たる社交界の母親達による醜聞の拡散をもって、「根無し草」(427)となり、「どこでもない位置へとたどり着いてしまう」(429)。「胡散臭いバックグラウンド」(429)をもつ“nobody”でしかないヴァルの姿に、再度ギャツビーの姿を重ねることができよう<sup>7</sup>。正統に対しての「成り上がり(start-up)」(97)たる篡奪者という二項対立は *Otranto* にも見られる。何者でもないがゆえにパフォーマンスが必須となる構図は先述の、アメリカン・ゴシックにおいては自己表象の不安定さと、アメリカの「無垢の新世界」の欺瞞がパフォーマンスを要求するという措定と呼応するものであろう<sup>8</sup>。

母の遺産とともに「スノビズムの危険な迷宮」(431)を渡りゆく術を身に付けたヴァルは、「四世代」の家禄を失ったエレンに求婚してなお「結局のところあなたは誰?」「何か胡散臭いひと」(433)と断ぜられてしまう。「モートメイン家の巨大な財産が出所の母体(matrix)へと溶けて滲み返り」(433)、ヴァル自身のいくばくかも引きずられてゆく感覚は、“*The Fall of the House of Usher*”中の土地と邸と住人が一体化するゴシック的感覚を想起させる。醜聞を拡散された補償としてペンドルトン家の庭師の職を得たヴァルは、当初出会ったエレンではなくその従妹マーシャと結婚する予兆が最後に示される。単純なラブ・ロマンスの成就とはならない<sup>9</sup>。四世代にわたるモートメイン家の蓄財という件では“generation”の語は過去からの系譜を示すために記されるが、母の遺産を得たのちの交友相手として「(醜聞ゆえに)自分に冷たくした下の世代」(431)は避けた、という箇所では、この語は現在から未来へのヴェクトルを示すものである。エッセイにおいても初期の“*What I Think and Feel at 25*”(1922)“*Wait Till You Have Children of Your Own*”<sup>10</sup> (1924)等から晩年の“*My Generation*”(1939)まで、“generation”の語の多用により、作家は絶え間ない世代交代と自分が置いて行かれる感覚を描く。フィッツジェラルドにおいて“generation”という語は、過去からの系譜という権威主義的文脈と、「若い人は自分達で楽しんでいますが、若い時は二度とないんですもの」(429)とペンドルトン夫人によって学

生達の集う社交界から拒絶される件にも明らかなように、若さの喪失という敗北主義的文脈の両面において用いられるのである。

### 3. “Crazy Sunday” (1932)

CS<sup>11</sup>ではハリウッドの大立者マイルズの「感動的な名場面を上演するための舞台」(699)たる邸宅<sup>12</sup>で毎日曜パーティが開かれる。新興国アメリカの新興産業のドンの邸宅は大西洋ではなく太平洋を臨みながらも、「アメリカのリヴィエラ」と旧大陸のモチーフをもって描かれる。この家で、脚本家のジョエルとマイルズの妻ステラは不倫関係に近づくが、マイルズが飛行機事故死し小説は終わる。「“unreal”から“real”を切り離すため」(699)ロンドンとニューヨークを行き来したジョエルの子供時代が冒頭に示されるが、これはマリンの述べる作家の非リアリズム的傾向(Malin 209-10)や現実・非現実の往来という Hogle のゴシックの定義(Hogle 2)とも合致する。Grebstein は冒頭から示される「不安定さ」「自壊」「過度の飲酒」「ヒステリア」等のモチーフが作中人物達の造型を端的に示すと述べるが(Grebstein 280)、これらもまたゴシック的要素とも重なるものであろう。題名の“crazy”は字義通りの古典的ゴシックモチーフの狂気であって、“rummies”たちの乱痴気騒ぎの比喩以上の役割を果たすのである。

「経帷子」(711)たる平日と「鮮やかな対照」を成す日曜のマイルズ邸で、「自己顕示欲」(701、703)が喚起したジョエルの「宴会芸」(701)「茶番」(702)に対するプロ達の反感は、「共同体のよそ者(stranger)に対する敵意」「一族(clan)の拒否」(702)というゴシック的用語で示される。そして一、三、五節冒頭の “It was Sunday”(698) “Crazy Sunday again”(704) “It was Sunday again”(711)という反復もまた強迫観念的ゴシック要素 (Sedgwick 127) として見なせよう。“real”と“unreal”のせめぎ合いは *The Great Gatsby* においても “the unreality of reality”(99)に端的に示されるように、作家の重要なテーマである。ここでは「皆が恐れている」(700)マイルズがゴシック的僭主のモチーフを引き継ぐかのように見えるが、彼は繰り返して記される「マザーコンプレックス」(705)の持ち主であり、「ナポレオンの母」(700)に例えられる彼の母親こそが真の専制君主であるともいえよう。マイルズは母親像を結婚相手に映すので「リビドー」(705)を他に求める旨が妻によって語られる。なおジョエルの母は、終盤ステラの「あなたの眼はお母さんの眼みたい」という言で再起される(709)。ジョエルにはステラの鮮やかな姿が英国貴婦人の“imitation”なのかその逆なのか決しがたいが、“imitation”の語は新興国アメリカのモチーフを裏打ちし、「まぎれもない本物とみえすいた猿真似のあいだを浮遊している」(705) エレンのパフォーマンス性をよく表す。

マイルズの留守を描く四節最後では大音声で鳴る電話、十二時を打つ廊下の時計の音などがゴシック的舞台建てを成し、最終節でマイルズの訃報が届く。電報配達夫の足音に「マイルズだわ!」と叫ぶステラは、「マイルズはそんなスーツをもってたわ」と死んだ夫をジョエルに重ねてゆく(712)。ジョエルと自分が浮気するのではないかという亡夫の懸案を維持することで夫の死の「認識/現実化」を回避しようとする姿は、狂気性とともなセジウィックが強調する「生きながらの埋葬」とも通じよう。ステラが訃報を、自分を苦しめるための「陰謀(scheme)」(712)だと言う件では、パフォーマンス自体が前景化された映画界という設定のもと、パフォーマンスを“personal”な領域に内面化してしまった人

間の苦悩が読みとられる。スーツによる亡夫とジョエルとの重ねは、繰り返して記されるマイルズの言「俺はステラに全ての面で影響(influenc[e])を与えちゃった。特に俺が好きなのは皆あいつも好きになるように、影響(influenc[e])を与えちゃったんだ」(708,710)や「マイルズはあなたを好きだったわ」(712)という言の反復とともに、マイルズのマザーコンプレックスと結婚におけるその「転移」が、“influence”という語のもとにステラにも伝染していることを示している<sup>13</sup>。再びドアベルや電話の音、自動車の音が断続的に鳴り始める。引きとめるステラを“I’ll be back”と振り切ったジョエルを襲う「玄関のステップに立つと、家そのものがブーンブーンと唸り、ドクンドクンと鼓動を打っているのがわかった。ちょうど亡骸<sup>なきがら</sup>を保護するかたちで降り積もった木の葉が何かの拍子で震えるように、生が死の周囲でざわめいているのだ」(713)という情景は *Otranto* 終盤、マチルダの死の直後の城と大地の揺れ(112)や“Usher”の最後の崩壊をも連想させる、ゴシック性に満ちたものである。マイルズは「触れたものすべて」に「何か魔術的なもの」を残していった、とジョエルは思う(713)。RC では「モートメイン(死手)」の名が示す、死してなお影響を及ぼす接触/伝染性のモチーフが、CS の最終盤にも確認出来るのである。物語は“Oh, yes, I’ll be back—I’ll be back!”というジョエルの述懐で閉じられるが、この「戻ってくる」という言は、死したマイルズからの呪詛のようでもあり、それは本稿でも多く扱った「死者の回帰」というゴシック性にも合致する。

## ・おわりに

証券業の発展・爛熟と 20 年代後半からのトーキー映画産業の勃興は、フィッツジェラルドの二十年間の作家人生の前半後半の背景を成すものである。時代に即したそれらの産業をゴシックモチーフと融合してロマンスを語るフィッツジェラルドの手法に、作家のアメリカン・ゴシックへの意識的な参画が窺われる。そしてそのゴシックとは、英国からの古典的要素に加え、パフォーマンスの形をとることになる。また英米ゴシックの原点 *Otranto* との共通項に照らすと作家のゴシック性が分かりやすい。評価の高い CS に比べ、他二作は従来失敗作としてみなされ、先行研究自体少ないが、本稿では作家のロマンスとゴシックの融合をよく確認出来るものとして注目した。「新世界アメリカの無垢」という神話の欺瞞が可能にあるいは強制するパフォーマンスは、すでに *Paradise* や *Gatsby* 等に<sup>14</sup>おいても確認されるが、本稿で扱った中・後期に来て、金融や映画業界に素材を求めながら、さらに反復強化され、発展するのである。

[注]

- <sup>1</sup> フィッツジェラルドにおける新興産業としての映画産業については上西哲雄氏の発表に教示を受けた。記して謝す。
- <sup>2</sup> 作家におけるジェンダー・セクシュアリティの問題については最新の研究である Irwin や *The Great Gatsby* へのクイア・リーディングの嚆矢である Fraser 等を参照。
- <sup>3</sup> Eleanor, Forrest という名と響きからデビュー作 *This Side of Paradise* でも明らかなポーの引喩を読み取ることもできよう。両作家の関連については Jonathan Schiff, James W. Tuttleton, Jeffrey Meyers らの研究がある。
- <sup>4</sup> 「成功への『アメリカ神話』を茶化した実録」(Prigozy 217) としての本作は Goddu の定義等と併せてゴシック的とも言えよう。
- <sup>5</sup> 『リーダーズ英和辞典』第二版(研究社、1999、2008)、“mortmain”の項参照。
- <sup>6</sup> Prigozy はこの継父の姓をヴァルの夢を叶える道を開いた「貴族的な名前」と評する (210)。
- <sup>7</sup> *Gatsby* との連関については Prigozy, 215 参照。
- <sup>8</sup> Prigozy はヴァルの服装に注目し、破産時の“farcical”な姿も含め、パフォーマンス的視点からの批評を行う(Prigozy, 212, 217)。
- <sup>9</sup> Harding は本作を“love story”のパロディ、“alienation”の物語と評する(Harding, 128-29)。Donaldson は加齢につれ作家は“golden girl”を勝ち取れるかどうか問題にしていられなくなったと述べ(Donaldson, “Money and Marriage,” 81)、Prigozy も本作のエレンは初期のヒロイン達のように発展させられないと述べる(Prigozy, 215)。
- <sup>10</sup> 両エッセイにおける世代意識については、Donaldson, “Fitzgerald’s Nonfiction,”167, 172 参照。
- <sup>11</sup> 本作のみ基本的に佐伯泰樹訳に拠る。
- <sup>12</sup> 全編を支配する劇場性については Grebstein 282-3 を参照。
- <sup>13</sup> ゴシックにおける伝染のモチーフは Ellis の吸血鬼の議論、拙稿「接触感染」を参照。

References

- Botting, Fred. *Gothic*. London and New York: Routledge, 1996. Print.
- Donaldson, Scott. “Fitzgerald’s Nonfiction.” *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald*. Ed. Ruth Prigozy. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 164-88. Print.
- . “Money and Marriage in Fitzgerald’s Stories.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Ed. Jackson R. Bryer. Madison, Wis.: The U of Wisconsin P, 1982.75-88. Print.
- Ellis, Markman. *The History of Gothic Fiction*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2000. Print.
- Fitzgerald, F. Scott. “Crazy Sunday.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner, 2003. 698-713. Print.
- . “A Freeze-Out.” *The Price Was High: Fifty Uncollected Stories by F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: MJF Books, 1979. 382-401. Print.
- . *The Great Gatsby*. New York: Scribner, 2004. Print.
- . “The Rubber Check.” *The Price Was High: Fifty Uncollected Stories by F. Scott Fitzgerald*. 417-436. Print.
- . *This Side of Paradise*. 1920. New York: Scribner Paperback Fiction, 1995. Ed. and introd. James L. W. West. Print.
- Fraser, Keith. “Another Reading of *The Great Gatsby*.” *English Studies in Canada* 5(autumn 1979): 330-43. Print.
- Gamer, Michael. *Romanticism and the Gothic*. Cambridge: Cambridge UP, 2000. Print.
- Goddu, Teresa A. *Gothic America: Narrative, History, and Nation*. New York: Columbia U Press, 1997. Print.
- Grebstein, Sheldon. “The Same Method of ‘Crazy Sunday.’” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. 279-89. Print.
- Harding, Brian. “‘Made for—or against—the Trade’: The Radicalism of Fitzgerald’s *Saturday Evening Post* Love Stories.”

- Scott Fitzgerald: The Promises of Life*. Ed. A. Robert Lee. London: Vision Press; New York: St. Martin's Press, 1989. 113-30. Print.
- Hogle, Jerrold E. "Introduction: the Gothic in Western Culture." *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*. Ed. Jerrold E. Hogle. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 1-20. Print.
- Hurley, Kelly. "Abject and Grotesque." *The Routledge Companion to Gothic*. Ed. Catherine Spooner and Emma McEvoy. New York: Routledge, 2007. 137-46. Print.
- Irwin, John T. *F. Scott Fitzgerald's Fiction: "An Almost Theatrical Innocence."* Baltimore: Johns Hopkins UP, 2014. Print.
- Malin, Irving. "'Absolution: Absolving Lies.'" *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Ed. Jackson R. Bryer. Madison, Wis.: The U of Wisconsin P, 1982. 209-216. Print.
- Prigozy, Ruth. "An Unsentimental Education: "The Rubber Check."" *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories*. Ed. and introd. Jackson R. Bryer. Columbia and London: U of Missouri P, 1996. 206-218. Print.
- Savoy, Eric. "The Rise of American Gothic." *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*. 167-88. Print.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *The Coherence of Gothic Conventions*. New York and London: Methuen, 1976. Print.
- Walpole, Horace. *The Castle of Otranto*. 1764. Ed. W. S. Lewis. Introd. E. J. Clery. Oxford: Oxford UP, 1996. Print.
- 千代田夏夫「接触感染—F. スコット・フィッツジェラルドのモダニズム・ゴシック—」  
『日本女子大学 紀要 人間社会学部』第 21 号、2011 年、97-112.
- フィッツジェラルド、F. スコット「狂った日曜日」『フィッツジェラルド短篇集』  
佐伯泰樹編訳、岩波文庫、1992.
- 上西哲雄「アメリカ映画を物語る」日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会研究会ワーク・イン・プログレス  
研究発表（2014 年 9 月 28 日、於奈良女子大学）